

ガンディーの非暴力と政治

中島 岳志

日本人にもなじみ深い存在

はじめまして。中島と申します。さて、今日は、ガンディーという人物の話をさせていただきます。

ガンディーと申しますと、皆さんやはり、ぱっとあの顔が思い浮かびますよね。半裸で、メガネをかけて、坊主頭で。あれだけぱっと頭に浮かぶインド人って、めずらしいですよ。他にもネルーとか、タゴールとか、いろんな人がいましたけれども、タゴールって言われてぱっと頭に浮かぶ人というのは、いらっしやるとは

思いますけれども、たぶん日本人では少ないんじゃないか。ネルーも同じだと思いますが、ガンディーは、ぱっと浮かびますよね。僕も中学生の時に、教科書に載っているガンディーの顔写真に落書きした覚えがあります(笑)。

「ガンディー見直し」の映画が大ヒット

では、インドではどうかというと、もちろん、ガンディーは「国父」ですし、すべての紙幣はガンディーの肖像画です。ちょっと皮肉なことですね。ガンディー

は資本主義経済に対して否定的な部分がありましたから、自分の顔が金もうけの象徴のお金に刷られているというのは忸怩たる思いがあるだろうと思います。ガンディーはだれでも知っていますが、ガンディーの哲学というのが本当にインドの皆に顧みられてきたかという点、そうでもなかった部分があります。

しかし数年前、ガンディーを少し見直そうというような映画が大ヒットしました。「ラゲー・ラホー・ムンナー・バライ (Lage Raho Munnabhai)」（2006）という映画です。これはコメディー映画で、主人公のチンピラ青年がガンディーの幻影に導かれて、さまざまな問題を解決していく、自らの中に内在するガンディー的なものに気づいていくというストーリーです。

インドでその時にはやった言葉は「ガンディー・ギーリー (Gandhigiri)」。ギーリーというのは「〜稼業」という意味ですけれども、現代社会の中で忘れてしまった生き方をもう一度、見つめ直さなくてはいけないんじゃないか。こういうふうなムーブメントがインドで起こったのが、数年前のことでした。

インドで、もう一度、ガンディーの思想が見つめ直された。それはやはり、近代インドが飽食の時代・消費主義の時代に突入してきたからです。上位の3割は近年の経済発展によって、豊かな暮らしをしています。

実はインドでは自殺率が非常に高いんです。日本も高いですが。最近のインドのほうが若者の自殺率が高いと言われています。苛酷な受験勉強などが影響して、インドも非常に閉塞的な時代というのを都市社会の中では迎えている。そんななかで、ガンディーをもう一度、見つめ直そうという運動がインドでも出てきたというのが、近年の動きでありました。

ガンディーはどういうことを考えたのか、私たち現代人にとってどういうメッセージをもっているのかということが、インドでも注目された。

だれもがわかり、参加できる運動

ガンディーの「塩の行進」というのを、ご存じの方もいらっしゃると思います。これは1930年のことです。ガンディーはもともとインド西部のグジャラート

州というところに生まれました。まずまず裕福な家庭です。そこで、後でも話をしようと思いますが、ガンディーは真面目なんですから、いろいろなことにチャレンジしたり、放蕩生活を送ったりもしました。幼児婚というんですが、妻と若い時に結婚して、性に溺れたりもしました。

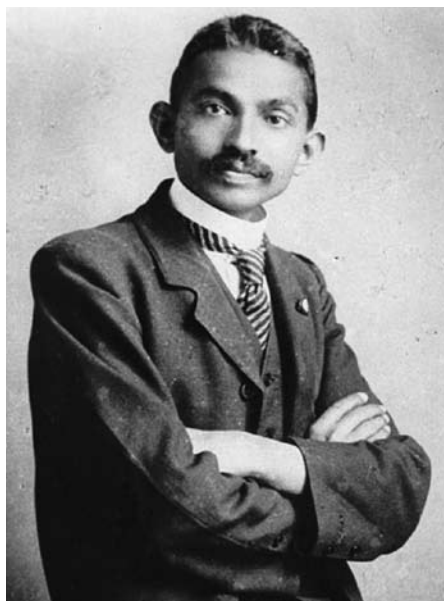
彼は、イギリスにわたって、その後、弁護士を目指し、そしてタキシードなんかを着て、西洋人になりきろうというふうな時期もあったりしたわけですが、彼が大きく転換したのは、南アフリカで弁護士業をしようとしていた時でした。有名な話は、南アフリカに赴任してまもなく、彼が鉄道に乗っていたとこのことです。彼は一等車に乗っていました。自分は弁護士なんだ、イギリスで認められた弁護士なんだ、立派な格好もしている。そういうふうな非常に強い思いをもって一等車に乗りました。しかし、車掌に追い出されるんですね。ガンディーは「なんだ、私は一等車の切符も持っているじゃないか」「何を言っているんだ。お前はインド人だ。二等車に移れ」と言われるわけです。しかし、ガンディ

ーは頑固な人ですから、「いや、私はここを離れない。一等に座る権利がある」と主張するわけですけども、無理やり途中の駅で降ろされてしまいます。それが、非常に大きな屈辱感になるわけです。

南アフリカは、アパルトヘイトなど非常に人種差別の厳しかった国ですから、黒人だけではなくて、そこで働いているインド人たちにも差別が非常にたくさんありました。ガンディーは、そこでさまざまな経験をし、そして弁護士の立場から、インド人の地位向上運動をやりながら、徐々に徐々に、自分の中にある欲望というものを目を向けていくことになりました。

西洋人たちがアジアやアフリカを支配しているその同じ心を、もしかしたら自分も近代人としてもっているかもしれない。何かを所有したい、誰かを独占したい。こんな思いというのを、私ももっているかもしれない。自分のなかにある植民地主義的な根性、精神ですね。所有したいという欲望、快樂を得たいという欲望、これに目を向けなければならないというのが、ガンディーの思いとなり、ガンディーは徐々に立派なスーツを

南アフリカでの弁護士時代（1906年、37歳ころ）



脱いで、頭も刈り上げて、例のガンディーになってくるわけです。若き日のガンディー、ぜひ写真を見てください。髪を七三分けにして、きつちりとスーツやタキシードを着て写っているガンディーがいます。そのガンディーから、あのガンディーに変身していったのは、南アフリカ時代の経験にありました。

こうした南アフリカでの彼の活躍というのが、19

10年代、インドでも話題になりました。「ガンディーよ、帰って来てくれ」というような動きが、インドで起きるようになってきました。このころは、インドの独立運動の低迷期なんです。1910年代の半ばくらいに、イギリスは徹底的に独立運動を弾圧したんですね。

そんな中、弾圧され続けて、「もう運動はテロリズムしかない」と思いつめたのが、東京の中村屋に亡命してきたラス・ビハリー・ボースという人です。ボースは、1915年という年に、インドにすることができなくなりました。「テロリスト」とされて、イギリス人目をつけられ、日本に亡命しました。

それとちょうど入れ替わりぐらいの1915年の夏に、ガンディーがインドに戻ってきました。ここから、インドの新しい独立運動が幕開けするわけです。彼は、非協力運動というのを始めました。イギリスに暴力で刃向かってはならない。暴力であらがっても何の意味もないんだ。そうではなくて、「協力しない」「ボイコットする」。そういう非協力運動をやり始めたわけです。しかし、後でご説明しますが、1922年、ある事

件が起こりまして、彼はこの運動をやめてしまっています。そして彼は、長く獄にもつながれました。こうしてインドの独立運動に長い低迷期が訪れるわけなんです。この独立運動が再び盛り上がってきたのが、1929年という年でした。日本でいうと昭和4年。そろそろ満州事変（1931年）、五・一五事件（1932年）が近づいてくる頃ですね。大恐慌の幕が開くのも、この年です。そんな1929年に、インドの独立運動は盛り上がっていきました。若手のネルーとか、もう一人のボース、チャンドラ・ボースという人が出てきたりして、これはもう頑張つてインドを独立に導かなくてはならない、インドは完全独立を目指すんだ。こういうことで一致団結した大きな決議が出ます。1929年の年末でした。そして、彼らはガンディーに期待するわけです。「もう一度、ガンディーよ、立つてくれ。もう一度、この独立運動を自分たちのために率いてくれ」。こういうふうに、若手の国民会議派——今も責任与党ですが——その代表者たちがガンディーにお願いに行きます。「ガンディーよ、一緒に戦おう。今こそインド中で再び

独立の気運が盛り上がってきた。一緒に戦おう」

そのときガンディーが、何をし出したか。「わかった。じゃあ、私は塩を作りに海岸まで歩いていく」と言い出したんですね。皆、びっくりしたわけです。何を言っているんだ。今、せっかく独立運動の機運が盛り上がってきて、これからだという時に、なぜガンディーは塩なんかわざわざ作りに行くんだ。皆は、とりわけネルーなんかは「考え直してください。今、一緒に立ち上がって、演説して、民衆を鼓舞してください」と言うわけですけども、ガンディーは「いやいや」と、聞き入れません。

現在、パキスタンと国境を接している西部のグジャラート地方が、ガンディーが生まれたところ。この中心都市がアーメダバードで、その郊外に、彼のアーシラム（修養道場）がありました。「サバルマティ・アーシラム」です。彼はそのアーシラムからずいっと海岸まで歩いて行くと言うんですね。歩いて行って、海岸で塩を作ると主張しました。何でそんなことを言うのでしょうか。

彼は実際に歩き始めました。最初は誰もついて来ません。ほとんど彼の従者だけです。半裸のような状態で、腰巻き、ドーティーといいますが、それを巻いた姿で、彼はとぼとぼと、いえ、まだ壮健でしたから(60歳)、すたすたと歩いて行っただけです。何でこんなことをしたのでしょうか。

「塩」というのが一つのポイントでした。どうして塩に彼がこだわったかというと、この時、塩は専売制だったんですね。イギリスが塩の生産・販売を独占していました。「おかしいじゃないか」と、ガンディーが言ったんですね。「これこそ植民地支配の象徴である。塩がなければ、人間は生きていけない。塩は、天からの恵みである。なぜイギリス人が独占するのか」。彼はそういうふうに言うわけです。

これは、難しい独立運動の中でも、庶民にわかりやすいよね。「そうだ、そうだ。何で俺たちは塩を作れないのか。そこにある海の水をすくってきて火にあぶって塩を作ると、なぜ逮捕されるのか」。「塩専売法」という法律で逮捕されるんです。これはおかしいというのは、

「塩の行進」の到着地・ダーンディー海岸で、塩を採る。ガンディーの後ろは次男マニラール



私たち庶民にも皆わかることです。ガンディーはまず、庶民が一緒になって怒ることのできる、わかりやすい具体的な対象を塩によって示したのです。

宗教対立を超える「行」——「歩く」

もう一つ、重要なことがあります。「歩く」というこ

とです。つまり、「行」をする姿を民衆に見せたわけですから、さあ、ここで難しい問題が出てきました。インドの宗教という問題です。

ガンディーは、ヒンドゥー教の家に生まれたヒンドゥー教徒でした。現在でもインドは11億人から12億人いると言われるうち、ヒンドゥー教徒といわれる人が、だいたい8割強です。あとの2割弱というのは誰かというと、多いのがイスラーム教徒です。大体、12パーセントくらいです。その他はいろいろですね。スイク教徒とか、キリスト教徒、ジャイナ教徒などが少数派として生活しています。

そういう宗教的な多様性のあるインドの中で、どういう問題が起きてきたかという点、宗教対立ですね。これが長い間、インドでの大きな課題です。特に、ヒンドゥー教とイスラーム教の対立です。いまだに根深く残っています。

そもそも、パキスタンという国ができたのが1947年、インドが独立する時でした。パキスタンと聞くと、「俺たちの若いころには西パキスタン、東パキスタンと

習った」という方がおられるかもしれませんが。うなずかれています方は年齢がわかってしましますが(笑)。たぶん1970年代以前に習われた方は、そう教わったはずですよ。東パキスタン、西パキスタンというのはイスラーム教の国ですね。もともとインド全体は大英帝国が支配していました。その英領インドが、いよいよ独立する。最終的には、1947年8月15日に独立するんですが、その時、ある大きなものが起こりました。イスラーム教徒が反発したんですね。10数パーセントのイスラーム教徒が「インドが独立するといっても、その後、デモクラシー、民主制を導入するとしたならば、結局のところ、多数決の原理によってヒンドゥー教徒が強くなってしまうではないか」と。そうしたら、せっかくイギリスから独立したのにもかかわらず、自分たちはまた、ヒンドゥー教徒の支配に脅えなければならぬ。こりゃあ、たまらん、と言い始めたんですね。

その代表者がジンナーという人でした。ジンナーは「二民族論(Two-Nation Theory)」というのを唱えました。つまり、インドには二つの民族がいる。ヒンドゥー教

徒とムスリム（イスラーム教徒）であると。当時は、一民族一国家という原則でしたから、一つの民族が一つの国家をつくれるんだ、インドに住んでいるイスラーム教徒を一つの民族であると仮定するならば、われわれがイスラーム教徒のための国をつくってしかるべきではないか。こういう論を立てたのです。

ガンディーは反対しました。「一緒にやるべきだ。独立した後のインドというのは、宗教に関係なく、皆が手を携えてやっていく国なんだ」。しかし、ジンナーはゆずらなかったわけですね。そして、最終的にイスラームの国家がインドの西側と東側にできることになりました。

当初は、東西パキスタンの一つの国でした。しかし、東の国は今、東パキスタンとは言わないですよね。西パキスタンにイスラマバードという首都が置かれ、経済、政治の中心がどうしても西パキスタン優位になったことから、東側から反発が起こり、東パキスタンは独立して、バングラデシュという国ができました。1970年代の初頭です。西パキスタンは、現在、パキ

スタン。ですから、パキスタンとバングラデシュという国は、ほとんどがイスラーム教徒です。

インドは、多宗教を容認する世俗主義をとっている国です。こういう宗教構成のわけですけども、一番大きな問題は、イスラーム教徒とヒンドゥー教徒の対立だったわけです。

インドの独立運動というのは、初期には、かなりエリート運動だったんですね。ティラク（パール＝ガンガードル＝ティラク）という指導者がいたんですが、彼は「これはだめだ。指導者がエリートばかりでやっていてはいけない。大衆運動にしなければいけない。大衆に訴えかけて、インド独立を導いていかなければいけない」。このように考えました。そして、民衆をかき立てて、運動に参加させ独立にもっていこうとして、そのきっかけを作るために、ヒンドゥー教のお祭りを使いました。ガネーシャという、象の姿をした神様がいます。シヴァ神の化身ですが、このガネーシャのお祭り、「ガナパティの祭り」を町で大々的にやって、その勢いを独立運動につなげようとしたんですね。「俺たちヒンドゥー

「教徒の慣習や生活を阻害する者は誰か。イギリス人じゃないか。あいつらを倒さなければ、自分たちも宗教的には解放されない」と主張したのが、ティラクでした。

これはうまくいきました。民衆が、この祭りの熱狂の勢いに乗って、このエネルギーを敵に向けていったわけなんです。僕は大阪出身ですから、岸和田の「だんじり祭り」などが身近でしたが、祭りというのは、本来に大変な勢いになりますよね。このようにして、民衆が独立運動に参加するようになってきました。

しかし、難点がありました。何だったか。ヒンドゥーのお祭りを使ったことによって、敵が一つにならなかったんですね。「自分たちを支配しているのは誰だ。イギリス人だ！そしてイスラーム教徒だ！」という話になってきたんですね。

さあ、ちょっと高校時代の復習です。インドには、中世に北インドを支配している大きな帝国がありました。ムガル帝国ですね。ムガル帝国で一番有名な建物は、タージ・マハルです。皇帝が、死んだお妃の

ために造った霊廟ですね。アグラという町にあります。そのムガル帝国というのが、中世の北インドを支配していた。そして、この国はイスラームの王朝でした。その前から、中世のインドでは、デリーを中心としてイスラームの王朝が続いていました。ヒンドゥー教徒が大半なのに、イスラームの王朝が続く。こういうねじれが生じていたわけですね。

ですから、20世紀初頭に、このティラクという人がヒンドゥー教のお祭りを使って独立するぞという運動を立ち上げた時に、敵はイギリスだけにならなかった。「イギリスは悪い。しかし、俺たちをずっと痛めつけて、支配してきたのは、イスラーム教徒ではないか」「悪いのは、あいつたちではないか」、こういうふうなことになったんですね。

このように「宗教的なものを政治に取り込もう」とすればするほど、宗教対立が政治の場で深まってしまう。こんな難点があったわけです。しかし、インドの人たちは非常に宗教に根ざして生きていますから、やはり宗教というのは、非常に重要な要素になっている。ガ

ンディーにとって、あるいはインドにとって、これが重要な、そして解決したい難問だったわけです。

ガンディーは、こう書いています。「私は政治の中に宗教を取り込もうとしています」。彼にとって、宗教の領域と政治の領域が別々であるというのは、おかしいことだったわけですね。宗教というのは宇宙全体の法則である。「ダルマ」という考え方がありますが、これは全体を包み込むものである。その全体の中に、よき政治というものが宗教的に位置づけられるべきである。これがガンディーの宗教観、政治観でした。だから彼の発想の中では、近代の政教分離というのは非常に問題のある考え方であるということになります。とはいえ、特定の宗教を使って政教一致にしてしまうと、これは絶対に、他者に対する攻撃や排除が生まれてしまう。これがさっきの、インドでの問題だったわけですね。

そこでガンディーが考えた思想というのは、何だったか。「歩く」ということだったんですね。

「メタ宗教」を見えるかたちで表現

少しややこしいお話をしますが、彼が考えたことは、こういうものだろうと私は思います。彼はずっとヒンドゥー教徒でした。と同時に、彼はヒンドゥー教という具体的宗教を超えた「メタレベル（二段上のレベル）」の、「メタ宗教」というのを考えた人なんじゃないかと私は思っています。

「メタ宗教」というのは私の造語ですが、ガンディーはこんなことを言っています。山にたとえるんですね。山の頂上というのは一つです。しかし、頂上に至る道というのは複数ある。蛇行して登る人がいるかもしれませんが。断崖絶壁をロッククライミングで登る人もいるかもしれませんが。あるいは、ぐるぐると回って登る人がいるかもしれません。いろんな登り方があるけれども、しかし、頂上は一つですよ。

ガンディーはこれを宗教にたとえます。頂上を彼を「真理」と呼びました。「真理は一つである。しかし、真理に至る道は複数存在する」。例えば、ヒンドゥー

ー教的な登り方をして頂きに行く人もいるだろう。仏教の道で登って行く人もいるだろう。イスラーム教徒の道もあるだろうし、キリスト教徒の道もあるだろう。それぞれ間違えているわけではない。結局のところ、言語や慣習を超えた普遍的な部分においては、本当の真理というところでは一つなのである。しかし、その登り道が複数ある。こう彼は考えました。

我々は、この「宗教の違い」を「真理の違い」と勘違いしてしまいがちですね。「俺たちは、イスラーム教徒とは絶対に分ち合えない」と思っているアメリカの原理主義者もいるでしょう。あるいは、イスラームの原理主義者も、「キリスト教徒と一緒に絶対やっていけない。それは間違った教えだから」と言うかもしれません。ガンディーは、それは違うと言うんですね。そうじゃない。宗教の違いを真理の違いと誤解してはいけない。真理は一つであるが、そこに至る道は複数あって、その道の違いが宗教の違いである。

ガンディーが言った宗教というのは、こういう二重の構造になっているわけですね。彼の道はヒンドゥー

教という道でしょう。しかし、それを超えた普遍的な真理の頂上の部分を考えました。これを私は「メタ宗教」というふうに呼んでいます。

だからガンディーは、宗教と政治というものを組み合わせようとした時に、具体的なヒンドゥーの儀礼というものを取り込もうとはしませんでした。だれもが共有できる、頂きに近い普遍的な部分、例えば、ただ「歩く」、また後でご説明しますが「食べない」とか、チャルカーという糸紡ぎ車を「回す」とか、こういう非常にわかりやすく、そして皆の目で見て宗教的なアプローチができる、そういう行為を、彼は政治の中に取り込んでいくことになりました。

その重要なポイントが「塩の行進」なんです。『歩く』ということ。彼が半裸の状態、そしてドーティーという腰巻一本で、ひたすら裸足で歩いていく。その姿を人々は見ると、イスラーム教徒も見ると、キリスト教徒も見ると、スィク教徒も見ると、ヒンドゥー教徒も見ると、いろいろな人を見ます。あるいは、

新聞や、いろいろな報道を通じて、想像をめぐらせませす。ガンディーが苦しい思いをして、炎天下で半裸の状態です歩いて行く。炎天下、厳しい苛酷な環境で働いている労働者にも、そういう姿は心に届きますよね。

そういうことから、ガンディーが最初、数十人で歩き始めたその列が、どんどん人々がついてきて、(約3週間後、380キロ離れた)ダーンディーという海岸に着するところには、先頭から後ろまでが何キロにもなったと言われています。彼は到着し、そして海水をくんで、塩を作り、逮捕されることになりました。

こうなると、インド全土がどっと盛り上がったんですね。「ガンディーの言う通りだ。俺たちも無断で塩を作ろう」ということになって、各地の海岸で、皆が塩を作り始めます。イギリスは止められない。インドのあの広い海岸を、全部はストップできません。ということで、どんどん皆が塩を作り始めて、町中で売り始めます。もう歯止めがきかないですね。こうして、「イギリスに抵抗しよう。イギリスには協力しない」となった。ガンディーは、このように非協力運動というものを、

ネルーやボースとは違うやり方で、熱狂的に盛り上げた人物でありました。ふつうは思いつかないですよ。これから独立運動を盛り上げようと思った時に、僕がもし政治家であれば、遊説をして、頑張つて主張をぶつけようと思うんですが、ガンディーは違うんですね。裸足で歩き出すんです。それが、インドの人たちに、階層を超え、カーストを超え、宗教を超えて、共感を生み出す。こんなことをやった政治家であり宗教者、これがガンディーだったわけです。

紛争をやめさせた「いのちがけの断食」

このように、ガンディーの政治の手法というのは変わっているんです。先ほど申し上げたように、ガンディーは、宗教対立という問題で、非常に大きな苦悩を抱え込みました。特に、もうちょっとで独立するという時、カルカッタという町で——今はコルカタという名前になっていますが——非常に厳しい宗教対立が起きました。ヒンドゥー教徒とムスリムが殺し合う、そんな状況になったわけです。

その時、ガンディーは、カルカッタの町に入りました。何をしたかというと、食を断つ。断食をするんです。一日と、彼はやせ衰えていきます。10日たつても、争いの火の手は収まりません。まだ紛争が続いています。15日がたちました。ガンディーはもう、起き上がれないくらい衰弱していきます。しかし彼は、食物を口にしようとはしません。この紛争が終わらない限り、私は死んでもいいと。死にいたる断食をやるというわけですね。人々の間に、動揺が始まります。このまま自分たちが争っているのは、もしかしたらガンディーを殺してしまうかもしれない。そういう思いが、民衆の中に湧いてきたんですね。

そんな時、ガンディーの目の前に、一人の貧しいムスリムの男が現われました。血相を変えています。手には銃を持っていました。ガンディーに言うんです。「ガンディーよ、お前はこのヒンドゥーとムスリムの争いをやめろといっている。しかし、現実を知っているのか。俺の大切な息子はヒンドゥー教徒によって殺されたんだぞ。それをどうやって許せるか。ガンディーよ、お

前は間違っている」。そう言って、ガンディーの目の前に現われた。「どうするんだ、俺の息子。こんなにも大切に愛して育てた一人息子を殺された俺の思いはどうなるんだ」

ガンディーは静かに答えます。「それでも争いをやめるべきだ」

「やめることはできない。やめたところで、俺の中には怨みが残り続ける。この怨みというものをどうすればいいんだ。俺は絶対に、ヒンドゥー教徒を許すことができない」

ガンディーは、こう言いました。「どうしても許せないのであれば、君は、ムスリムに殺されたヒンドゥー教徒のみなし子を育てなさい。ヒンドゥー教徒の孤児を、ヒンドゥー教徒として育てなさい。そうすれば、あなたの中に憎しみを越えた真理が芽生えます」。そういうふうに言うんですね。「真の許しというものが、そこで芽生えます。その怨みというものを、超えなければなりません」

そうすると、その男は泣き崩れて、武器を捨てたそ

うです。「わかった」と言ったそうです。こうして、カルカタでの争いは、びたりとやんでいくという結果になりました。

今、こんな人、いるでしょうか。今、どこかで紛争が起きた時に、「よし、断食して、この紛争を解決しよう」なんて考えるような人が、どれだけいるか。なかなかいないですよ。夢のような話だと聞こえるかもしれませんが、僕も政治学というのをやっているんですが、政治学の教科書に、平和のための紛争解決の方法として「断食せよ」と書いてあるものはひとつもないですね。にもかかわらず、です。たった60年前に、これは現実起きたことなんです。60年前というと、もう自分は生まれていたという方もいらっしやるでしょう。そういう事実がある。それが、僕は非常に重要な、重たいことだと思うわけです。

もちろん、すべてに応用できるわけではありません。しかし、ガンディーが示したことが、ある普遍性をもっとも、もっている可能性がある。「飢えながら祈る」ということ、それが人々にもたらした効用ですね。

彼が考えた宗教というのは、こういう次元のものでした。特定の宗教の教義を超えた「メタレベル」のものでした。しかも、それを僕みたいに難しい「メタ宗教」という言葉で語ったものではありません。彼は、半裸で歩く、食べない、そんな行為で示すがゆえに、皆が心を動かされたわけです。

糸紡ぎ車を「回す」意味

それに関して、もう一つ重要なのが糸紡ぎ車、「チャルカー」です。手作業で糸をカラカラと紡いでいく。ガンディーは皆に、これを回せと言うんですね。政治指導者も、金持ちも、貧乏人も、男も女も、農村でも都市でも、皆がこれで毎日、糸を紡ぎなさいと。インドの今の国旗の真ん中には、「チャクラ」という模様が描かれていますけれども、これは法輪でありながら、糸紡ぎ車のシンボルでもあるわけです。インドの独立運動期には、正式な旗の真ん中に、糸紡ぎ車が堂々と掲げられていました。

なぜガンディーは、この糸紡ぎ車をシンボルにした

のか。一つは、イギリスの産業に対する抵抗です。「富の流出」という現実があったわけです。インドの中心部のデカン高原地帯、ここが綿花の栽培地でした。この綿花という原材料を、インドはほとんど栽培しては輸出させられたんですね。それを使って、イギリスが自国の工場で繊維を作り、服を作って、製品がインドにまた戻ってくる。原材料よりも、うんと高くなって戻ってくるんです。それをインド人が買う。これでは、どんどん富がインドから抜けていくじゃないか。原材料は取られて、自分たちはそれで作った繊維類を高く買わなければいけない。これは富の流



サバルマティー・アーシュラムで(1925年)

出である。近代産業の中で、海外に依存してしまうと、富が流出していく。こういう議論がありました。

だから、ガンディーは言うんですね。「自分で作ろうじゃないか」。「スワデーシー」ということを、彼は言いました。「スワ」とは「自ら」の意味です。「デーシー」は「国の」という意味で、「自国産品愛用運動」のことですね。

自分たちが作った材料を使って、自分たちで作って、そして自分たちで使おうじゃないか。イギリスを困らせ、イギリスの産業による支配を打破するためには、自分たちで着るものを自分たちで作らなければならぬ。だから、皆で糸を紡ぎましょう。それがガンディーの主張でした。

この中には、近代の機械文明に対する批判もありました。機械によって、ものが大量生産され、そして大量消費をする。そういう世の中に対する、彼の根源的な不満と批判がありました。手作業が大事なのだと、ガンディーは一生懸命、言いました。自分たちの手で作り、自分たちの手で配り直す、それが大切なんだと。近代文明は、どうしても欲望を加速する。だから機械

製の工業はやめて、手作業に戻ろう。自分たちの必要なものだけを、必要な分だけ作ろう。そういう意味を込めて、彼はチャルカーを重視しました。

糸紡ぎ車には、もう一つ具体的な意義がありました。それは、女性に職を与えるということです。女性はなかなか、特に夫に先立たれたりすると、もうお金を稼ぐすが、当時のインドにはありませんでした。今のインドの農村部でもそうですけれども。そんな人たちに、「糸を紡ごう。そして余った分については売ればいいじゃないか。それで現金収入を得て、それを最低限の生活をやっていく糧にしよう」と。女性にも仕事を与えようというのが、彼のこの提案の中には含まれていました。

これも「メタ宗教」というものでしょう。彼は静かに、「行」をするように、ただ回すんですね。ものすごく忙しい時でも、彼は必ず毎日、回しています。「塩の行進」の後、ロンドンに行つて円卓会議に臨むんですが、夜の2時から3時まで仕事をして、5時に起きる。そんな無茶苦茶なスケジュールをこなしながらも、5時に起

きて、チャルカーを1時間くらい回すんですね。これが必要れば心が落ち着かないというふうになっていたんでしょう。

インドのヒンディー語の中に、「平和」を示す言葉があります。「シャーンティー」というんですが、これは、日本語の「平和」という言葉や、英語の「ピース」とは、ちよつと違つていて、もともと「心の平穩」という意味があるんです。心が落ち着いて、豊かになり、平穩に落ち着いている。こういう意味があります。ガンディーは、このチャルカーを回していると、「シャーンティーが訪れてくる」と言ってますね。これは単に戦争がない状態、暴力がない状態という消極的な概念ではなくて、心と体が落ち着いていくという「心の平穩」、まさにそれが「平和」というものだ。チャルカーを回そう。これが彼にとっては、非暴力という構想や創造力とつながっていたのだと思います。

こういう、歩く、食べない、回す——誰でもわかる行為によつて、「メタ宗教」というものを示し、インドを教育し、そして「政治の中に宗教を取り込む」「宗教

の中に政治を包み直す」という作業をやるうとした人物でありました。

「メタ宗教」というのは、多くの宗教の違いを認めながら、同時に一つの真理を求めていくということで、これと同じようなことは、いろいろな人が言っていて、例えば日本の西田幾多郎もそうですね。「多と一の絶対矛盾的自己同一」という難しいことを言った人ですけれども、そう言われて、ピンとくる人は、ふつうはいないですよ。けれども、ガンディーのように、「歩くんですよ」と言われると、ピンときます。ここがガンディーのすごいところです。彼は、観念の世界だけでなく、それを行為として示すことができた、非常にすぐれた人物だったと思います。

「非暴力」は「正義を行う勇氣」

さて、こういうことを前提にして、今日のテーマの「非暴力」という問題を少し考えてみることにしたいと思います。非暴力というのと、ぱっと、「暴力がない状態」というふうに思われるかと思います。

ガンディーがやったことで重要なのは、例えば、イギリス人にいくら殴られても、彼は「殴り返すな」と言うんです。イギリス人に殴られ続けても、隊列を組んで、一人ずつ殴られていくんですね。バシッと殴られる。すると血を流して、後ろに行く。次の列がまた行く。バシッと殴られる。それをずーっとくり返すんです。手出しをしない。ガンディーは、こんなふうに言いました。「そのうちイギリス人たちは、あることに気づくだろう。殴られている痛みよりも、棒で殴られた一瞬の痛みよりも、ずーっと殴り続けていることの心の痛みのほうが、強くて根深くて重いということに、彼らは気づくだろう。それに気づかせれば、非暴力が訪れる。だから、われわれは絶対に手出しをしてはならぬ」と。

ということで、隊列を組んで、わざわざ殴られに行くわけですね。そして、イギリス人を困らせるわけですね。実際、自分が、イギリスの下級兵士だったとしましょう。インド人の隊列が押し寄せてくる。バシッと殴る。殴っても、殴っても、どんどんどんどん人が来る。狂ってしまおうでしょうね。イギリス人にとっては、恐ろし

かつたでしょう。武器を構えてくる相手のほうが恐ろしくくないですよ。ガンディーは、そういうふうにして、イギリス人の心の中に訴えていこうとしました。このように、彼の非暴力というのは、ある種の非常に戦闘的な姿勢でした。

では、彼はつねに暴力を単純に否定したのかというと、実は少し難しい問題が起ってきます。ガンディーは、ある人に、こういう少し意地悪な質問をされました。「例えば、目の前で女性が男に暴行されているとしよう。非暴力というならば、あなたは、それを黙って見ているのか」。ガンディーは答えました。「いや、私は黙って見ていない。まずは、足にすがりつく」。やめろと言っただけで済む。それでも、その暴力が終わらない場合には、「私は力づくで、やめさせる」というふうに、ガンディーは言っています。

もう一つ、こんなことがありました。ガンディーの近くに、ある子牛がいました。子牛は片足が悪くて、もう立てないんです。餌を食べることもできなくなり、ずーっと苦しんでいる。息をするのも難しくなっ

死ぬことは、時間の問題になっている。ガンディーは子牛を2日間、見守っていました。まだ苦しんでいました。3日目になりました。ガンディーは、子牛を殺すよう命じました。ガンディーは、これは「暴力を超えた正義」であると言っています。この子牛から痛みを取り除いてあげる。その価値が、具体的な手段としての暴力の悪を上回った時、その暴力というものは正当性を帯びるということを、彼は言っています。つまり彼は、すべての暴力を単純に否定した人物ではないのです。

暴行されている女性を放っておくのかと言われた時に、彼は、こう言いました。「非暴力を臆病の盾にしてはならない」。単に暴力がない状態が非暴力だということになれば、不正が行われている時に黙って見ているほうが正しいということになってしまう。臆病な、勇気がない人間が正しいということになってしまう。そうじゃないと言うんですね。まず暴力以外のかたちで最善を尽くすべきだ。それでも、相手がどうしようもない場合には、正義のための暴力を使うしかない。ガンディーは、そう主張しました。

難しいところですね。彼は、単に暴力を否定しただけではありませんでした。それよりも彼が重要視したのは、意志とか勇氣というものでした。「自分が大切にしているのは、暴力がない状態じゃなくて、非暴力への意志である」とも言っています。非暴力というのは、とつても勇氣のいることだ。暴力をはたらかないということとは、とつても勇氣のいることだ。その意志をもつこと。これが重要なのだと。後でふれますが、彼にとつて重要なのが欲望という問題です。彼はこう言っています。「暴力は、最大の欲望である」。これを、何とか人間は超えていかなければならないというのが、ガンディーの思想の中にありました。

ガンディーが愛読し、手放さなかった本があります。『バガヴァッド・ギーター』という、インドの重要な聖典です。『マハーバーラタ』というお話の中の一部ですが、これは『ラーマヤナ』と並ぶインドの有名な叙事詩ですね。「マハー」とは「偉大な」という意味です。「バーラタ」は、インドのことです。インドの、特にヒンディー語圏の人たちは、自国のことをインドとは言わず、

「バーラト」と言います。日本人も日本のことを「ジャパン」と言わないで「日本」と言いますよね。それと同じように、インド人にとっては、インドは「バーラト」なんです。ですから、「マハーバーラタ」は「偉大なインド」です。

「マハートマー・ガンディー」と言いますね。「マハートマー」というのは、後からつけられた尊称です。本当のガンディーの名前は「モーハンダース・カラムチャンド・ガンディー」と言います。「マハートマー」の「マハー」は「偉大な」という意味で、それに「アトマン」つまり「魂」という言葉をつけた。

インド哲学に「梵我一如」という概念があります。「梵」は、宇宙全体のことと考えられています。全体の普遍的な、神でもいいでしょうし、真理でもいいでしょう、宇宙全体というものです。それと「我」の究極の本質が一つであることに気づく。「梵我一如」であると感じく。それがヒンドゥー教では重要な意味があります。今、ヨーガがはやっていますが、やせるため、あるいは健康のために行く人が多いと思います。なにも

悪いといっているんじゃないですよ(笑)、ヨーガをやることは大変よいと思いますけれども、本来的には、ヨーガというのは「梵我一如」の精神を身につけるための宗教的な作法なんです。

この「梵」を「ブラフマン」といい、「我」を「アートマン」といいます。ですから、「マハー・アートマン」で「偉大な我」。「我」は「魂」ですから「偉大な魂」。「マハートマー・ガンディー」と言っています。

ちよつと脱線しましたけれども、『マハーバーラタ』というお話に入っている『バガヴァッド・ギーター』。どんなお話かというと、一人の重要な神様が出てきます。ヴィシヌ神の化身である「クリシュナ」という神様です。時間がないのでくわしいことはご説明しませんが、このクリシュナが、アルジュナという王子に語るんですね。アルジュナ王子が、自分の親族がいる国と、今、戦おうとしている。相手が明らかに不正をはたっている。平和な世界を作るには、どうしても戦わなければならない。しかし、相手の国には親族がいるし、戦うのはいやだという時に、このクリシュナが言うん

です。「アルジュナよ。戦いなさい。勇気をもって戦いなさい。暴力はいやだという気持ちよりも、正義を行うことを優先しなさい」。正義を実行することが「ダルマ」、それぞれに与えられた役割なんだと説くんです。

ガンディーは、この書を重視しました。彼にとっては、暴力を使うかどうかの問題よりも重要だったのは、真理に近い正義とどうつながるかということだったんです。その真理の中に、もちろん非暴力というものが含まれています。しかし、現実社会には暴力があふれている。それを、どうしても超えなければいけない。そうして、その手段として、どうしてもどうしても、最後の最後、暴力を使わなければならないという時には、正義のための暴力が許される。ガンディーはそういう立場に立っていました。

ですから、彼は、独立した後のインド国家の中に警察組織ができることを認めました。完全に非暴力だったら、警察はだめですよ。国家というのは、唯一、合法的に暴力を行使できる装置だというのが、政治学的な定義です。僕たちが人に暴力を振るえば、これは

非合法です。しかし警官は、国家のお墨つきがあるから、犯人を暴力をもって締めつけたら、あるいは正当防衛で、場合によっては射殺することもあるわけです。ガンディーは、独立したインドの中で、この警察組織と刑務所などを認めました。

非暴力とは、単に暴力を捨てることではなく、打破すべきは臆病の精神であり、それを超えた勇気が大事である。それによって正義につながってくる。難しいところですが、これが、ガンディーにとっては重要なポイントだったわけです。

東洋的な「否定の論理」

もう一つ、ガンディーの哲学で面白いと思うのは、「非暴力」とか「不服従」とか「非協力」とか、「食べない」とか「欲しがらない」とか「持たない」とか、否定形が多いんですね。僕たちが、何か理念とか価値とかを語ろうとすると、たぶん、「こうするべきだ」というふうに一生懸命語るでしょうね。僕が政治家だったら、「子育て支援が大切だ。それを認めない何々党はだめだ」とか言う

でしょう。何々すべきだというふうに、前のめりになって語るでしょうね。

しかし、ガンディーはそういうことをしません。「○ ○ない」「○ ○しない」「非」「不」——こんな否定形で語っていくわけです。これは面白いところだと思っています。「否定の論理」が、ガンディーの重要な論理としてあります。おそらくインドの哲学とつながっているんだろうし、東洋哲学というものの真髄とも、つながっているんじゃないかと思います。

「我思う、ゆえに我あり」ということを言ったデカルトという人がいますね。彼は、自分が本当に存在しているのかということを徹底的に疑った人です。俺は本当にここにいるのか。もしかしたら、目が覚めたら、これは幻かもしれない。夢かもしれない。本当にここに私が存在しているということを証明するのは、なかなか難しいんですね。「これは本当かどうか分からない」と言っている私が、そもそも本当にいるかどうかともわからない(笑)。そんなことになってくるわけです。

デカルトは考えに考え抜いた末に、一つだけ疑うこ

とができないものがあると。それは、私が今、疑っているということだ、考えているということだ。唯一、疑うことができないのは、私が本当にいるのかどうかを考えている、その「思考」である。だから、ここで自分の存在を証明できる。「我思う、ゆえに我あり」ですね。私は考えている、だから私は存在しているんだ、というふうに言ったんですね。

これがすごく重要な意味をもったのは、これが「近代」というものを開いたからでした。つまり、人間の理性に基づいて、すべての存在を証明できるとする流れが、このデカルトの思想から生まれてきたんですね。それ以前は、だいたい神というものが、いろいろな存在の証明を担当してくれていました。しかし、「我思う、ゆえに我あり」ですから、私の存在は、私が思っているから存在する。ここに私の存在の原理があると。これは、近代理性主義というもので、ここから様々な合理主義というものが生まれてきました。神なんかそっちのけで、自分たちで正しいものを考えよう。啓蒙主義というのが生まれ、近代思想というのが生まれてきたわけ

ですが、この中には、どうしても人間の理性、能力に對する驕りというのが出てきますね。そこから、人間は何でもできるんだというふうに思ってしまうと、乱開発が起きたり、いろいろな問題が起きてくるわけです。

しかし東洋哲学というのは、そうではない。西田幾多郎の哲学について、京都学派のある先生が、こういうふうに言いました。東洋の哲学は、「我思う、ゆえに我あり」ではなくて、「我なし、ゆえに我あり」だ、と。私の本質などというものは、どこを探しても存在しない。存在しないけれども、私というものは存在する。つまり、私の本質など、そう簡単に理性によって見つかるものではないと、そうわかった時にこそ、実は、私という存在に本当に気づくんだと。「無の思想」というものですね。

仏教に「五陰」という考え方がありますね。「般若心経」にも出てきますけれども。いろいろな要素——色・受・想・行・識——が、たまたま仮に組み合わさって、自分というものを形成していると考ええる。そういう、た

またまの現象として私がいる。しかし、私の本質なんていうものは本当はない。そう気づいた時はじめて、私は、私というもののくびきから自由になる。私はこうでなければいけない、こうあらねばならないというような思い、とらわれから解放されて、本当の私というものに出会うんだと。

そういう「ない」「無」の論理、こういうものと、ガンディーはつながっているんじゃないかと思ったりします。インド哲学では、「あなたは何ですか」というような問いかけを、よくやります。「あなたは脳ですか」と。私とは私の脳みそのことかという、そうじゃない。「じゃ、あなたは、そうやって見ている、その目ですか」「違います」。「では、あなたとは、あなたの体ですか」「いや、違います」。「じゃ、あなたとは、あなたの心ですか」「いや、違います」。「こうやって、「しかし、あなたは存在しますよね。それが、あなたですよ」というふうに、「アトマン」というものに行き着き、それが「ブラフマン」——宇宙全体とつながっているんですよと説くようなやり方があります。そのような、インド哲学の「ない」

とか「否定の論理」と、ガンディーの「否定」がつながっているんじゃないかと思います。

「何々すべきだ」というのは、やはり「支配の論理」を生み出します。どうして、あなたはそうしないんだ、しないのは悪いというように、一種の価値の強制が起きてきます。これに対し、「何々でない」からは、「反省の論理」が生まれてきます。暴力はいけない、食べない、持たないということで、飽食などの「もっと欲しい」という欲望への反省が生まれてきます。こういう『「ない」の論理」というのを考えたのが、ガンディーという人だったのかもしれない。

真の「自治」とは「自己^{セルフ・コントロール}統御」

ガンディーが考えた欲望の問題に少し向き合ってみたいと思います。彼は、近代社会というものを疑いました。近代社会には、欲望があふれすぎている。だから、近代のあり方を組み替えていかなければならない。こんなことを主張しました。

その時に重要なのは、どういうことだったかという

と、先ほど少しお話したように、ガンディーはインドに戻って非協力運動を始めましたが、1922年2月に、ある事件が起きたことによって、この運動をきっぱりやめてしまいました。次に運動を復活させるのが「塩の行進」ですから、8年間、ガンディーは政治的には概ね沈黙したわけですね。ガンディーはなぜ、自分で盛り上げた独立運動をやめちゃったのか。

そのきっかけとなった出来事は「チャウリ・チャウラ事件」というものです。チャウリ・チャウラーというのは、インド北部の地名です。そこである事件が起きました。インドの人たちが、自分たちをずっと抑圧してきた警官たちに、とうとう怒りをぶつけたんです。

インドの警官は、ラーティーという警棒でバシッと殴ります。僕も一回、殴られたことがあります。自慢することではないですけども(笑。すごく痛いんです。インドの民衆はちよつとしたことで、いつも殴られていました。

「チャウリ・チャウラー事件」では、いつも殴られてきたインド人たちが、とうとう警官たちに怒りをぶつ

けました。群集を弾圧しようとして、警官が無防備の民衆に発砲したんです。それで農民たちが怒って、警官たちを警察署の中に追い込んでいった。そして火を放ち、警官22人を焼き殺してしまった。ざまあ見ろ、そういうような思いが強かったんでしょう。こういう事件が起きました。

ガンディーは、その知らせを聞いて激怒しました。激怒するというか、「今のインドは独立するには値しない」と言い始めるんですね。「こんなことなら独立運動をやめてしまおう」と。なぜか。「暴力を使って、暴力の欲望に支配されたままインドが独立したって、何の意味もない」と。「何の意味もない。もうひとつのイギリスを作るだけじゃないか。新しいインドを私は作るうとしている。暴力や欲望を超えた、近代を超えた国家というものを作ろうとしている。にもかかわらず、こんな状態のままでは、独立したとしても、インドという名前のイギリスができるだけではないか」。そう言っ、て、ガンディーは非協力運動を停止してしまいました。

ガンディーは、インドの独立を「スワラージ」と呼びます。「スワデーシー」が「自国産品愛用運動」でしたね。それと一対の概念である「スワラージ」は「独立」あるいは「自治」などと訳されます。

「スワ」はヒンディー語で「自ら」という意味。「ラージ」は「統治」「支配」の意味です。「自らを統治すること」というのが「自治」「独立」の本来の意味なんです。ガンディーにとっての「スワラージ」、独立というものは、単に国が独立することではありませんでした。自分の欲望をコントロールし、自制する、自分を統御するという意味も込めていた。英語で言うところ、セルフ・コントロールです。これを達成することが、真の独立である。インド国民がすべて、このセルフ・コントロールをなす。自己を抑制し、統御し、それによって暴力や欲望を超えた新しい国を作っていく。これがガンディーにとっての独立というものでした。こういう独立ではない独立だったら、別のイギリスになっちゃったただから、独立運動をやめてしまえというのが、ガンディーの考え方だったんですね。

ガンディーは、こう言っています。「インドをイギリスが取ったのではなくて、私たちがインドを与えたのです。インドにイギリス人たちが自力でいられたのではなく、私たちがイギリス人たちをいさせたのです」。自分たちインド人の欲望が、イギリス人を招いてきたのだと。また、こんなふうに言っています。「イギリス人を連れてきたのは私たちだ。イギリス人がここにいるのは、私たちのせいだ」。そして、こう言います。「本当の自治は、私たちの心の支配だ。自分で自分の心を統御し、欲望から解放されなければならない」。これが、ガンディーにとっての自由とか独立ということでした。

「弁護士も医者もいらない」

このように、ガンディーにとっては、さまざまな近代の欲望の装置というものが、疑問の対象になっています。ここから、「ガンディーに我々はいっているのか」という、極端な話が続いていくことになります。

岩波文庫で出ていますので読んでいただきたいんですけど、『真の独立への道（ヒンド・スワラージ）』と

いう本を書いています。その中で、ガンディーは、現代を悪くしているものが3つあるというんですね。1つは弁護士だと。こちらに弁護士の方がいらつしやったら、大変衝撃的な発言ですけれども。2つ目は、鉄道はいらなと言うんです。3つ目は、医者もいらな。なぜ、こんなことを言ったのか。

まず鉄道を考えてみましょう。ガンディーが言うには、今、こうやって鉄道があるから、欲しい物を、欲しい人のところへ、大量に届けることができる。そうすることによって、富の偏りというものが生まれてしまふ。貧しい地域と富める地域とが、鉄道の発展によって色分けが激しくなる。また穀物を高く売れるところに売ろうとして、鉄道で運ぶから、地域的な飢饉が起きてしまう。こういうふうな欲望というものを、鉄道が人々に生み出してしまった。

彼は「人の移動というものは、自分の身体で行ける範囲でやる方がいい」と考えていました。自分の足で、自分で歩くということを重要視した。ところが、自分の手足を超えた鉄道を敷くことによって、結局、伝染

病や災害や犯罪が国中に蔓延することになったじゃないか。「鉄道で邪悪が広がります」と。そんなことを言うんです。

私が非常に好きなガンディーの言葉に、こんなものがあります。「よいものはカタツムリのように進むのです」。彼が疑ったものは、単に鉄道という装置ではなくて、近代のスピードだったんだろうと思うんですね。彼は「近代は速すぎる」と思ったんでしょう。毎日毎日、忙しく何かしなければいけない。私なんかも、今日帰ってから原稿を書かなければいけない。かわいそうでしょう(笑)。こんなのは忙しすぎると、カタツムリのように歩めと、ガンディーに怒られると思いますけれども。

鉄道を否定したガンディーは、にもかかわらず、鉄道に乗って、いろいろなところに遊説に行くんですけども(笑)。鉄道に乗って、鉄道はいらなと言ってあるんですからね、矛盾しています。この矛盾が面白いんと思うんですが。

2つ目、弁護士ですね。何で弁護士はいらないかと

いうと、弁護士がいるから争いごとが起きるんだと言
うんですね(笑)。ふつう農村とか村落の中では、だいた
い皆が、まあまあと言って収めていただろう。しかし、
弁護士が出てきて、どんどん争いを深めていく。弁護
士がいるから、相手を訴えてやろうと思うような邪悪
な心が生まれるんだと、弁護士を経験した彼が言い始
めるわけなんですね(笑)。

弁護士がいるから争いが起きる、俺が弁護士だった
んだから間違いないと彼は言っています。だから弁護
士はいらない。弁護士は争いごとが起これと喜ぶ。金
もうけのために、争いがないと、争いを起こそうとす
ると、彼は言うんですね(笑)。対立を煽ろうとすると。

もう1つ、医者です。これは意外ですよ。病院は
罪惡の根源です」とまで言う。びっくりしますね。なん
でこんなことを言っているのか。「病院があるので、人
間は身体にあまり注意を払いませんし、不道徳がはび
こるのです」と言う。ちょっと不節制したって、病院に
行けば治してくれる。だから反省しない。薬で治れば、
また暴飲暴食をする。病院があるから、自分たちの欲

望というものが、どんどん解放されてしまう。

彼は、「土療法」とか「水療法」とかの自然療法で、だ
いたい治るんだという思想をもっていたので、大変で
す。子どもが高熱を出した時にも、彼は西洋医学の医
者にかけないんですね。死にそうだ、高熱を出している。
だから栄養のあるスープを飲ませよといっても、ガン
ディーはきかないんです。いや、私は水療法と土療法
で治すと言って、布を水で濡らして体に巻いたり、土
と水を混ぜた泥の湿布を貼ったり、そういうもので治
そうとしました。ガンディーは、このように近代医
療というものを否定しようとした人ですね。

「私は、本来の限界に従って、周囲に住んでいる人に
奉仕できます」という言葉を残しています。自分の身の
丈にあった、自分の身体でできる範囲、それが重要な
んです。これを超えた欲望をもとうとするから、さま
ざまな争いが起きるんです。弁護士も鉄道も医者もい
らない。これがガンディーの思想でした。

皆さん、どうですか。ガンディーの思想にどこまで
ついていきますか(笑)。

「欲望」を超えられるか

さらにややこしいことを、ガンディーは言い始めます。自分のもっている欲望に、彼は向き合うんですね。最大の問題が、性欲という問題でした。

自伝の中に書いていますが、彼は若い時、13歳ぐらいで結婚しました。そして性欲に溺れていきました。しかも妻は、晩年になるまで文盲で、文字が書けませんでした。ガンディーは妻に文字を教えようとも思いますが、もっぱら性の対象にしている、こういう強烈な言葉も書いています。「自分は妻を性交の器だと思っていた」と。

そんな思いをもっていたんですが、ある時、反省することになります。16歳のとき、彼の父親が死ぬんですね。彼は父親を非常に尊敬していて、ずっと看病していたんですけれども、看病の最中、性欲に負けて、つい妻のもとに行ってしまった。それから何分もたたないうちに知らせが来て、父が死んだと言われるんですね。しまった、自分が性欲に溺れているから、その

間に父が死んでしまった。父の死に目に会うことができなかった。こういうことがあって、彼は自分の性欲という問題に向き合おうとしますが、しかし若い間は、なかなかこれが消えることはありませんでした。

彼は、もっと若い時には、肉食の家庭なのに、肉食べないとイギリスには勝てないとか言って、わざわざ肉を食べたり、あるいはタバコを吸ったり、盗みをしたりしました。そして、自殺未遂をしたりしました。彼は非常に強い名望欲ももっていて、なんとか成功して有名になりたいと思いい、イギリスに渡るわけですね。タキシードを着て、ダンス教室に行つて、イギリス人のような振る舞いをして、出世しようとしています。

彼は正直に書いていますが、そのころ浮気心を起こしたこともあるんですね。イギリスの女性に対して、自分の妻以外に性欲をもった瞬間があったという。具体的には何もなかったようですけれども。また、金銭欲も彼はもっていたんですね。

しかし、南アフリカ時代、30代の半ばくらいから、こういう欲望に自分で向き合うようになります。自分

の欲望にメスを入れ、そして妻に宣言するんですね。もう、性行為は行わないと。子どもも4人いて、非常に厳しい教育をしたんですが。

さらに、彼は妻に、同じように厳しい行為を要求します。「なんだ、そのお前のアクセサリーは。捨てろ」と。「そんな装身具なんていらんじゃないか。自分を飾ろうとしている。そんなものはいらん」と言う。妻は、カストゥールバーイーというんですが、夫に従って、それを捨てました。しかし、泣きながら、ガンディーをなじります。「私が捨てるのはいい。けれど、うちには息子が4人もいるんですよ。息子に嫁いできたお嫁さんはどうするんですか。結婚式の時も着飾ってあげてはいけないんですか。そんなことも、あなたは奪おうとするんですか」と言うんですね。「そうだ」とガンディーは答えます。

ガンディーは、人間の差別というものを超えようとしています。アーシユラム（修養道場）を作って、一番低いアウトカーストの人たち——不可触民という言い方呼ばれますが、その人たちと一緒に生活をして、同等の

身分として扱おうとしました。便所掃除も自分たちで全部やりましょう、自分の便所だけじゃなくて、人の便所もちゃんと掃除しましょうと。ガンディーは率先してやりました。でも、妻はどうしてもアレルギーがあるんですね。生まれ育った環境がそんなところじゃないですから。そして、ガンディーに言います。「私は、あなたにほとんどのことは従っていいと思う。けれど、これだけはできない。何で自分が、他の人の便所の掃除までしなければならぬのか。そんなことは、どうしてもできない」。すると、ガンディーは妻をつまみ出そうとするんです。「出て行け」と。「そんな人間はここには必要ない。そんな心をもっているやつは必要ない」というふうに言うんですね。

妻は「私に、どこに行けと言うの。私はあなたの妻ですよ。ここを出て、ほかのどこに、私の居場所があるの。何であなたは、そんなにつらいことを言うの」と嘆くわけです。そうすると、ガンディーは怒って、妻をドドドーッと玄関のところまで押しやるんですが、はっとなって、「いや、ごめん」と謝ります。しかし、それでも、

やつぱり便所掃除をしろと言うんですね。暴力的に扱ったということはわびるんですけども、掃除については主張を変えない。

さらに、こういうことも言います。「私はあなただけを愛しているんじゃない。人類を愛しているんだ」と。これ、つらいですよ。僕は結婚しているので妻がいますけれども、妻に突然「あなただけを愛しているんじゃない。世の中すべての人を愛しているの」なんて言われたら、困りますよね。愛というのは、だいたい偏っているものですよ。『ほかでもない、あなただけが好きなんだ』と言われるから、愛というものが現われるわけ。しかも、愛には、どうしても所有欲が出てくるんですが、ガンディーは「皆を愛しているんだ、お前なんかじゃない」って言うんです。これは言われるほうにしてみればつらいですね。

所有してもいけない。ものを持つてもいけない。着飾ってもいけない。豪華な食べ物もいけない。帰ってビールを飲んじゃいけないんですよ、お父さんたち（笑）。このように、欲望を超えよと、彼は言いました。これを、

私たちがどこまで受け入れることができるかという問題ですね。

したがって、非常に重要なことは、ガンディーは生まれながらの聖人ではないということです。ガンディーは、近代というものを、あるいは近代の欲望というものがもつ作用を、よく知っていた。そして、その欲望に自分が支配されてきたという反省をもつて、これから距離をとろうとした人物です。彼は意識的に、意志をもつて、勇気をもつて、それを克服しようとしていました。彼は、近代というものを身をもって体験してきたがゆえに、その近代の行き詰まりに気づき、それを意識的に超えていこうとした人物でした。そういうものから距離を置き、自分を反省せよ。自分の欲望と向き合い、反省せよ。反省したならば、行動せよというふうに言った人物でした。

そして、この思想を、「歩く」「食べない」「回す」というような、とても普遍的な、おそらく国を超えて私たち日本人にも、そしておそらく未来の人間にも届くような行為として、価値として投げかけた人でありま

した。

塩を作る、チャルカー、便所掃除、祈る、歩く、食べない、持たない、殴らない、妬まない。なかなか全部はできないんですけれども、こういうことに反省的になりなさい。これらと非暴力が、そして政治というものがかかわっているのだと言った人物でした。そういう精神をもっていない政治家に、はたしてよい政治家ができるのか。自分の欲望と向き合っていない政治家が、そういう信仰心というものをしっかりとっていない政治家が、本当の政治をすることができるのか。こんなことを鋭く投げかけたのが、ガンディーという人物でありました。

おそらく皆さまも関心をもっているんじゃないと思いますが、政教分離の問題がありますね。これについてガンディーの考え方は、非常に参考になるんじゃないかと、僕は思います。ガンディーは宗教についていろいろ言いますが、特定の宗教を政治の中に取り込もうとしたわけではありません。特定の宗教を優遇しろと言ったわけではありません。特定の宗教を政治的に弾

圧せよと言ったわけではありません。すべての宗教は頂きが一つなんだと。これに気づくことだと。そして、気づくためには、歩いたり、食べなかったり、回したりすること。これによって、連帯していこう。世界とつながっていこうと考えたのが、ガンディーという人物でありました。

まだまだ私たちは、ガンディーから学ぶことがあるんじゃないかなというふうに思っております。

(なかじま たけし／北海道大学公共政策大学院准教授)

(本稿は2009年10月28日に札幌で行われた当研究所主催の公開講演会の内容をまとめたものです)